

聖 德 大 学
言 語 文 化 研 究 所

論 叢 14

ISSN-1346-857X

聖徳大学言語文化研究所 論叢 14	印刷 平成十九年二月十五日 発行 平成十九年二月二十五日	発行人 川並弘昭	編集 聖徳大学言語文化研究所 〒二七一―八五五五 千葉県松戸市岩瀬五五〇 電話〇四七―三六五―一一二一（大代表）	発行所 聖徳大学 〒二七一―八五五五 千葉県松戸市岩瀬五五〇 電話〇四七―三六五―一一二一（大代表）	編集協力 (株)エサップ
-------------------	---------------------------------------	-------------	--	--	-----------------

©聖徳大学言語文化研究所

Printed in Japan

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています



本文用紙のみ100%再生紙を使用しております



聖 德 大 学

言語文化研究所

■

論 叢 14

江苏工业学院图书馆

藏 书 章

はしがき

学生を選抜する、学生の成績評価をする、このように「選抜」「評価」という語は、かつては学生に對して用いる語でした。しかし、今やそれが大学自身に向けられた語に、大きく変貌しています。大学が選抜され、大学が評価を受ける時代になったのです。

文部科学省が始めた「特色ある大学教育支援プログラム」はまさに選抜で、新聞各紙はこの取組の結果を毎年大きく取り上げています。採択されれば、教育G P 適格の称号を与えられたようなもので、称号を得ていない大学との格差を示すものと、一般には受け止められているのが現状です。

本学においても、本年度、「人間力を養成するユニット別キャリア教育―社会に貢献できる自立した女性の育成―」のテーマが、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代G P）の「実践的総合キャリア教育の推進」部門で採択されました。幼稚園から大学院まで一貫した女子教育を目標にしている本学にとっては、このテーマで採択されたことは、誠に慶賀すべきことであり、直接関わった教職員のみならず、ここまで盛り上げてきた本学全大学人の労を多とするものであります。

このプログラムは、社会に適応力を持つ女性の育成という、教育に関するものですが、大学における教育は教育のみで存在するものではなく、必ず研究と補完関係にあります。今回のG P 採択も、限らない日常の研究に基づいて生まれたものであると考えられます。

教育と研究の統合がいかに必要であるかは、今回、教育技法（F D）に関して、教育と研究の統合を

図ることを目的に、新たに紀要『聖徳の教えを育む技法』が創刊されたことでも明らかです。

今日、いずれの学問分野においても細分化の研究現象を呈し、ともすると研究の意義や方向が見失われがちですが、聖徳大学の研究が、ただ研究室内の机上の研究であってはならないことは、生涯学習研究所や家族問題相談センター、子育て支援社会連携センターなど、実践的名の付く研究施設の存在が示しています。言語文化研究所をはじめ本学の各研究所が、こぞって公開の講演会・シンポジウム・研究会を開催していることは、日頃の研鑽の成果を社会に還元し貢献する意味において、高い評価を受けるものと確信しています。

人間文化の基本である言語を根本に据えて文化を研究する言語文化研究所の活動は、関係者各位の高邁な学問観・教育観・社会観・人生観に根差したものでなければならぬと思います。その研究成果を世に問うべく『聖徳大学言語文化研究所 論叢』14号を刊行いたします。本論叢の各論文が建学の精神に基づき、研究の本来の在り方を問い、教育に資するものであることを願っています。

御笑覧の上、御叱責、御提言を賜ることができれば幸いに存じます。

平成十九年二月吉日

聖徳大学長 川並 弘昭

はしがき	川並 弘昭	3
天窓の思想		
—— 覺を穿って物を投げ入れるスサノオと神武の神話——	山口 博	11
デュナミスとエネルギー——「キアスム変換」が拓く眼前の風景——	茂木 和行	69
「真景累ヶ淵」の描写検証（続々）		
—— 水海道・横曾根・羽生村中心に——（2）	高橋 光男	119
新興美術家協会の成立と消滅 一九三五—一九四三		
—— 玉村善之助、恩地孝四郎、小野忠重、伊藤熹朔の周辺——	桑原 規子	151
慈円の軌跡——九条家における仏法興隆をめぐる——	清水 眞澄	195
明治日本人の中国イメージ——内藤湖南の《燕山楚水》を中心に——	呉 衛峰	233
	* * *	
女性という神話	藤井 繁	266

ジョヴァンニ・アンブロージオ・ダ・ペーサロ

『実践の書、あるいは舞踊の技術について』(1463)

Giovanni Ambrosio da Pesaro/De pratica seu arte tripudii, 1463. — その一 —

監訳 川崎淳之助

翻訳 安広美智子／岸田 真弓／佐藤 純

325

6 音階 (Hexachord) ㄣㄥㄣㄣ 佐藤 純

420

Giovanni Ambrosio (Guglielmo Ebreo da Pesaro) とその周辺 岸田 真弓

426

時空の表象——舞踊記録を読み解く—— 市瀬 陽子

433

* * *

JSL 児童日本語教育研究報告

(平成18年度 言語文化研究所 プロジェクトB) 北村 弘明

457

* * *

聖徳大学言語文化研究所総覧	487
研究所構成員・研究所経緯	
研究連続講演会・研究発表会	
研究所講座・プロジェクト	
『論叢』総合目次	528
あとがき	553
山口 博	

聖德大学言語文化研究所

論叢

14

天窓の思想

—— 甍を穿つて物を投げ入れるスサノオと神武の神話 ——

目次

はじめに

- | | | | |
|---|--------------|----|---------------|
| 一 | スサノオ神話のベース | 六 | 介在する高倉下 |
| 二 | スサノオの天斑馬投下 | 七 | ニギハヤヒの東北アジア性 |
| 三 | 神武東征神話のベース | 八 | 東北アジア民族の天窓の思想 |
| 四 | タケミカヅチの剣投下 | 九 | 天窓を通る日月の光 |
| 五 | 倒立したタケミカヅチの剣 | 一〇 | 太陽神との聖婚の系譜 |
| | | | おわりに |

はじめに

記紀には、屋根に穴を穿つて、その穴から物を投下〔〕する話が二つある。一つは高天原において、スサノオがアマテラスの服屋の頂（甍）に穴を穿つて、天斑馬（天斑駒）を投下したという『古事記』

山口 博

『日本書紀』の話であり、一つは葦原中国の神武東征神話熊野山中において、タケミカヅチが高倉下の倉の頂に穴を穿って、その穴から倉の中に、剣を投下したという『古事記』の話である。

この屋根の頂に穴を穿って物を投下した事件を契機に、局面が大きく転換した。スサノオは高天原から下界に追放され、神武は敗色の状況を脱して大和平定に大きく前進する。

この二つのエピソードをそれぞれ個別に把握している限りは、特に問題の所在も感じさせない。しかし併置すると、局面展開の方法として、屋根に穴を穿って物を投下するという、類似の構想で語られていることに気が付く。

スサノオの場合は、服屋の入口から投げ入れることが出来そうなものを、天斑馬を担いでわざわざ屋根に登り、屋根に穴を穿って投下しなければならない理由が理解出来ない。そのような疑問を呈した論も知らない。

タケミカヅチの場合もそうである。高天原から葦原中国にある高倉下の倉の中に、剣を投下したのであるから、倉の屋根に穴が穿たれたことも、それほど不自然ではないように考えてしまいが、そうではない。剣を投下した衝撃により、屋根の頂に穴が穿たれたのではなく、「此の刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむ」であって、剣を投下するために、先ず穴を穿ったのである。単純に「雷電が家を直撃する現象の神話的表現」²⁾とは言い切れないのである。

局面を大きく転換させる「物」は、屋根から投下されるという思想があり、この二つのエピソードは、その反映かと思われてくるのである。スサノオが天斑馬を屋根の頂に穿った穴から投下する行為の意味については、既に『聖徳大学言語文化研究所 論叢』10号で「須佐之男命神話の原像―遊牧民族の系譜―」と題して掲載した拙論で、僅かではあるが触れている。その拙論をも吸収してまとめあげた『古代文化回廊 日本』³⁾では、更に幾らか詳しく述べている。今回はその後の資料と思考を加えるこ

とにより、より広い視野からこの問題へのアプローチを試みるものである。

一 スサノオ神話のベース

スサノオについての私考のベースは、『聖徳大学言語文化研究所 論叢』10号掲載拙論の副タイトル「遊牧民族の系譜」にある。その詳細は既拙論及び『古代文化回廊 日本』に譲るが、東北アジア遊牧民族→高句麗民族→出雲民族の流れの中に、スサノオを位置させるものである。スサノオの乱行のすべてが農耕破壊行為であることから、スサノオとアマテラスの対立を、遊牧民族と農耕民族との対立と視る。

その視点に立つと、スサノオの決定的乱行である天斑馬の一件も、別の様相を示してくる。動物の皮を剥ぐという所為は、柔和純朴な農耕民族にとっては残酷なことであるが、遊牧民族にとっては、日常の事柄である。遊牧民族が犠牲にする獣は、羊・狗・馬等様々あり、馬を犠牲にする民族の代表がスキタイであるが、スキタイだけではない。アルタイ遊牧民の多くが、死者のために馬を犠牲にして供養し、生きた馬を思わせるような形で、馬の皮を斜めに立てた柱に刺し通したり、白樺の木に掛けたりする。日本でも、古墳時代の四条畷市奈良井遺跡の方形周溝遺構の溝の中から、日本最古の馬の頭骨が祭祀用土製品と共に出土しており、一頭は板の上に横たえられ、他は切り取った頭だけという埋葬方法から、祭祀の犠牲馬かと見られているのである。

スサノオが投げ込んだ馬は「天斑馬」(天斑駒)で、斑模様馬である。投下されたのはおそらく、皮を剥かれた赤裸の馬身ではなく、斑模様の皮の方であろう。斑動物を神の使者として崇拝する習俗は、エジプトの聖牛アピスに発して、西アジアの斑牛、東アジアの鹿に至るまで広がっており、儀式に

際して神に捧げる犠牲獣として斑牛や斑羊を殺したのである⁽⁴⁾。スサノオの場合も、『古事記』も『日本書紀』本文も天斑馬を投下する記述の前に、スサノオはアマテラスが大嘗を聞こしめす殿に、尿を撒き散らしたとあるので、「忌服屋」という名の建物をも勘案すると、天斑馬を投下する一件も、大嘗の時と考えられる。スサノオは大嘗の祭りなので、斑馬を犠牲に供したという話が、原形であったと思われるのである。

スサノオの乱行という視点からすると、投下された馬皮は、汚れた忌むべき物のように読み取られてしまう。しかし、牛皮・猪皮・鹿皮・熊皮などの獣皮が、道饗祭・疫神祭・障神祭・蕃客送堺神祭・花鎮祭の祭料とされたことは、『延喜四時祭式』『臨時祭式』に見えている。これらの祭りは、悪霊である疫病神を追い払うための祭りであり、それに獣皮が用いられていたのは、獣皮が汚れや忌むべき物ではなく、疫病神などの悪神を追い払う能力を備えている神聖な具であることを語るではないか。大祓の具としての獣皮は、天武紀五年八月に「鹿皮一張」、「養老神祇令」に「皮一張」とあるから、天武朝以前からの風習である。

アルタイ系シャーマンは獣皮の上着を着け、獣皮の帽子を被り、角を付け、鳥の羽を着ける。動物がシャーマンの守護霊であり、その皮を身に着けることにより、獣の持つ大力・走力・飛翔力等々、人間の備えていない能力が身に付くと考えたのである。スサノオが斑馬の皮を投下したのは、乱行ではなく、シャーマンの獣皮信仰からである。

二 スサノオの天斑馬投下

天斑馬を投下するのに『古事記』⁽⁵⁾は「服屋の頂を穿」ったと言う。本文を見よう。

天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣を織らしめし時に、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥きて、墮し入れたる時に（穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時）、天の服織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。

屋根の隙間から投下したのではなく、わざわざ頂に穴を穿ったのである。

同じ場面を『日本書紀』では、

又天照大神の方に神衣を織りて斎服殿に居しますを見て、則ち天斑駒を剥にし、殿の甍を穿ちて投げ納る（則剥天斑駒、穿殿甍而投納）。是の時に、天照大神驚動き、梭を以ちて、身を傷ましめたまふ。（本文）

一書に曰く、是の後に稚日女尊、斎服殿に坐して、神之御服を織りたまふ。素戔鳴尊見して、則ち斑駒を逆剥にし、殿の内に投げ入る（則逆剥斑駒、投入之於殿内）。稚日女尊、乃ち驚きて機より墮ち、持たせる梭を以ちて、身を傷めて、神退りましき。（一書第二）

一書に曰く、（中略）且日神織殿に居します時に、則ち斑駒を生剥にし、其の殿の内に納る（則生剥斑駒、納其殿内）。（一書第二）

一書に曰く、（スサノオの農耕破壊を挙げ）日神愠りたまはず。恒に平恕を以ちて相容したまふ。云々。（一書第三）

一書第一、一書第二は単に殿の内に投げ入れるのであるが、本文は『古事記』同様を穿つことにこだわりを示しており、一書第三の「云々」を本文と同じと解釈するならば、この書も屋根を穿つたのである。